学生アンケートにみる若者たちの社会意識

高橋　克巳*・綾　牧子**

Youth Cognition of Social Groups as Observed in Questionnaire Research

Katsumi TAKAHASHI, Makiko AYA

要旨　近年の若者論によれば，身近な集団における人間関係の希薄化，ある種のナショナリズムの高まり等が生じていると言われる．これは従来から指摘されてきた日本の学校文化論，すなわち学校や学級という身近な集団への帰属意識の高さを特徴とする見方と食い違っている．現代の若者たちの社会意識はどうなっているのか，簡単なアンケート調査を実施した結果，「愛国心」「愛国心教育」を肯定的・やや肯定的に捉える回答は，確かに多く見られたが，それは素朴なものであり，また家族や学校・学級という身近な集団を大切に思うという回答も非常に多かった．これらのことから，身近な集団における人間関係の希薄化，ある種のナショナリズムの高まりが同時進行しているとは必ずしも言いきれない，と結論づけられた．

キーワード：愛国心　愛国心教育　学校文化　若者論

はじめに

青少年の人間関係の希薄化が指摘されている．たとえば，平成 19 年 1 月 30 日に出された中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて－青少年の意欲を高め，心と体の相伴った成長を促す方策について－（答申）」第 2 章－2 において，「データが示す青少年の生活実態等の現状と課題」として，「希薄な対人関係」が指摘されている．

その一方，若者たちのナショナリズムの高まりを指摘する声もある．たとえば，香山リカは若者たちによる「屈託のない」ニッポン主義の高まりを「ぷちナショナリズム症候群」と呼んだ（香山，2002）．身近な集団における人間関係では，極度に気を遣いながら，やや距離を置いた「希薄な」関係を保ちつつ（土井，2008），その一方で，国家という大きな社会集団には積極的にコミットしていこうとする姿が浮かび上がる．

こうした若者たちの社会意識に関する知見が正しければ，従来から指摘されてきた日本の学校文化の在り方と大きく食い違うことになる．従来，日本の学校における子どもたちのクラス集団への帰属意識の高さは，繰り返し指摘されてきた（高橋，1997）．その一方で，国歌斉唱・国旗掲揚の問題が示すように日本の学校において愛国心教育は非常にセンシティブな扱いを受けてきた．つまり，国家という大きな社会集団へのコミットメントはさして強められないが，クラスなど身近な集団へのコミットメントはきわめて強く内面化されるような仕組みが日本の学校に存在してきたと理解できる．しかし，近年の若者論は，そうした従来の知見を覆すようなものとなっている．このギャップをどう考えればよいだろうか．

かつて森田洋司は，戦後日本における子どもたちの社会意識の変化をプライバタイゼーション（privatization）という概念を用いて記述した（森

*たかはし　かつみ　文教大学教育学部教職課程
**あや　まきこ　文教大学人間科学部非常勤講師

田，1991）．彼によれば戦後日本には「第一次私事化」「第二次私事化」という二段階のプロセスがあったという．「第一次私事化」とは「個人を直接全体社会や地域社会へと接合する献身価値の回路の衰退と，中間集団を媒介集団として全体社会や地域社会へと献身する回路の衰退によって，個人と中間集団との関係だけに献身価値が一元化した」ことである．そして「第二次私事化」，すなわち「中間集団である企業や学校社会に対する献身価値すらゆらぎを示し，充足価値へと『価値の秤』が傾斜する段階」へと移行してきた，という．

先の指摘と併せて考えると，今や次の変化が生じている可能性もある．この変化では，もう一度，国家という大きな集団へのコミットメントが高まるのかも知れない．ここで思い出されるのは，社会学者の作田啓一が『個人主義の運命』という著作の中でかつて論じた，「ナショナリズムと個人主義が提携して，真ん中の共同態主義を挟み撃ちにしていく過程」という言葉である（作田，1981）．

そのようなことが，現代日本でも生じているのだろうか．学級集団における人間関係の希薄化と解体，個人主義化，そしてナショナリズムの高まり，それらが同時に進んでいるのかどうか，検証が求められている．

本稿は，現代の若者たちの社会意識について素朴なアンケート調査を実施し，以上のような問題意識に基づき，若干の考察を試みたものである．

1．調査の概要

(1) 調査時期・方法・対象

2006年10月～11月にかけて，文教大学の教育学部・人間科学部・文学部の学生を対象に質問紙調査を行い，合計295人から回答を得た．回答は小学校教員免許関係科目の講義の機会に行われ，その場で質問紙を配布・回収した．

こうした調査方法の性質上，学生の属性として，2年生以上，小学校教員への就職希望が強いことなどが挙げられる．なお，回答者の男女比は，ほぼ半々であった（男性54.6％，女性45.4％）．

(2) 調査項目

調査項目は，「属性」「愛国心について」と「愛国心教育について」および「自由記述」の大きく四つから構成されている．なお，項目作成においては，毎日新聞が2006年，鳥取県の大学生400人を対象に行ったアンケート調査を参考にした（2006年9月6日毎日新聞）．質問項目の概要は以下の通り．

Ⅰ．属性

Ⅱ．愛国心について

・愛国心を感じたことがありますか．

・どんな時に愛国心を感じますか．

・愛国心と愛郷心（郷土を愛する心）に違いがあると思いますか．

・次の五つのうち，あなたご自身が強く感じるものを三つ選んでください．

a）日本の土地や自然・国民などを大切に思う気持ち

b）生まれ育った都道府県や市町村を大切に思う気持ち

c）在籍している学校やクラスの友人や先生を大切に思う気持ち

d）親や兄弟など，家族を大切に思う気持ち

e）自分自身を大切に思う気持ち

・国民に愛国心は必要だと思いますか．

Ⅲ．学校教育における愛国心教育についてお聞きします．

・高校卒業までに学校で愛国心教育を受けたことがありますか．
それはいつですか．
何の時間に教わりましたか．

・教師を志す者として愛国心教育にどの程度関心がありますか．

・愛国心を学校で教えることについてどう思いますか．

・教育基本法に愛国心教育に関する項目を盛り込むことについて，あなたの考え方に近いものはどれですか．
  a）賛成．教育の目的として，国を愛する心を明確に盛り込むことは必要．
  b）反対．憲法の思想信条の自由など内心の自由を侵す恐れがある．
  c）分からない．
・学校において愛国心を評価することについて，あなたの考え方に近いものはどれですか．
  a）賛成．学習指導要領の規程に即した評価は当然である．
  b）反対．愛国心教育において評価はなじまない．
  c）その他（具体的に）

Ⅳ．自由記述

2．愛国心に関する学生の考え方

(1) 結果概要

まず，結果の概要をグラフ化して，簡潔に紹介していく．

まず，愛国心を感じているかどうかを質問した結果，約 83 %の学生が「はい」と答えた．多くの学生は，何らかの形で愛国心を意識していると言えそうである．しかも，無回答（欠損）がきわめて少ないことから（1.0 %），自覚的な意識をもっているのではないかと推測される．

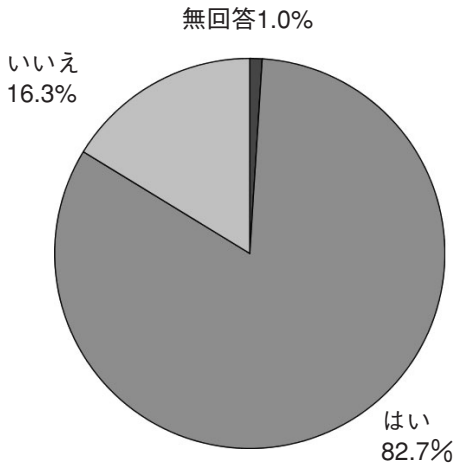

図１　愛国心を感じるか

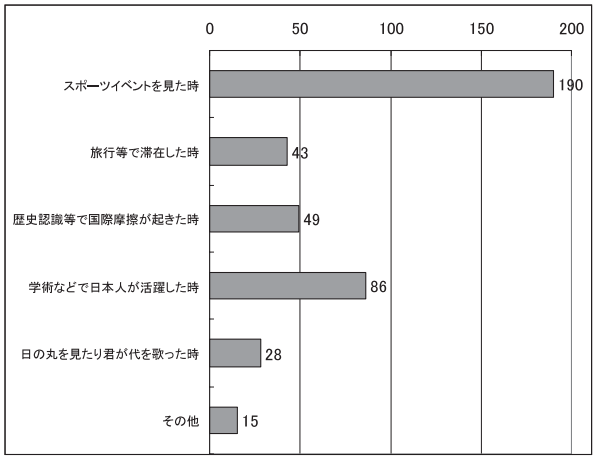

図２　どんな時に感じるか

次に「どんな時に愛国心を感じますか」についての結果は図 2 の通りである．なお，2 つまで回答可としているため，合計は 295 にならない．

最も多い回答は「スポーツイベントを見た時」である．全回答者 295 人のうちおよそ三分の二に当たる 190 人（64.4 %）が選択しており，この項目への集中が顕著である．次いで「学術などで日本人が活躍した時」（86 人），「歴史認識や領土問題など国際摩擦が起きた時」（49 人），「旅行・留学などで海外滞在した時」（43 人）と続く．8 割の学生が感じているという「愛国心」とは，スポーツイベントの時などに日本チームを応援するという程度の「軽い」ものを意味していることがうかがえる．

また「愛国心と愛郷心（郷土を愛する心）に違いがあると思いますか」という質問について，図 3 に示す．

約 62 %の学生が「はい」と回答していた．ただ，その違いを自由記述で質問したところ，国と市町村など規模の違いとして認識されている場合が多く，国会等でしばしば議論になる「行政機構を含むか否か」等，その理念を深く認識した論述は少なかった（詳細は後述）．

では，規模別に考えた場合，どのレベルに最も

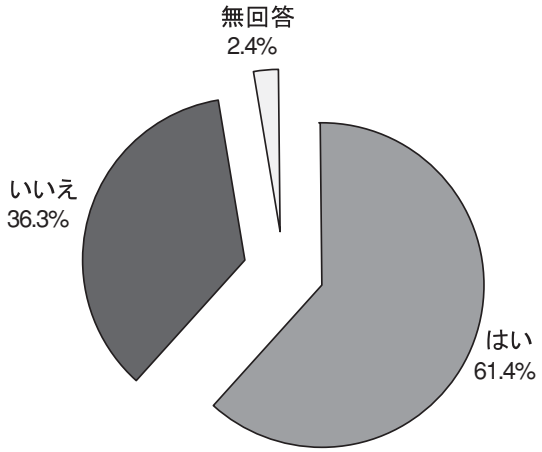

図３　愛国心と愛郷心の違い

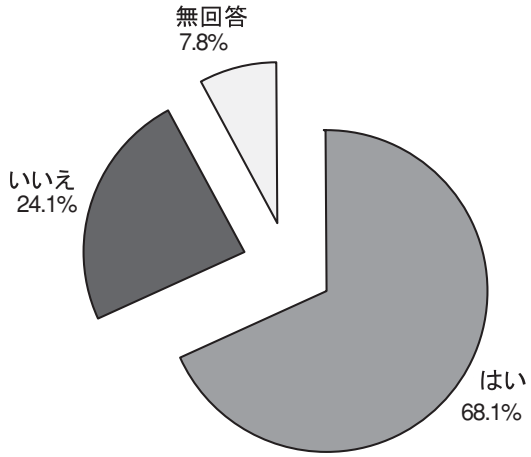

図５　愛国心は必要か

愛着を感じるのであろうか．それを知るために，国・地域・学校やクラス・家族・自分自身の五つのうちから，「強く感じるものはどれですか」と質問してみた．なお，この質問は三つまで選択可としたため，合計は295にならない．多かった順に見ると，家族（約90％），学校・クラス（約69％），自分（約54％），地域（約50％），国（約33％）であった．家族や学校の友人という身近な集団を選ぶ学生が多く，規模が大きくなるにつれて少なくなっていく傾向がある．

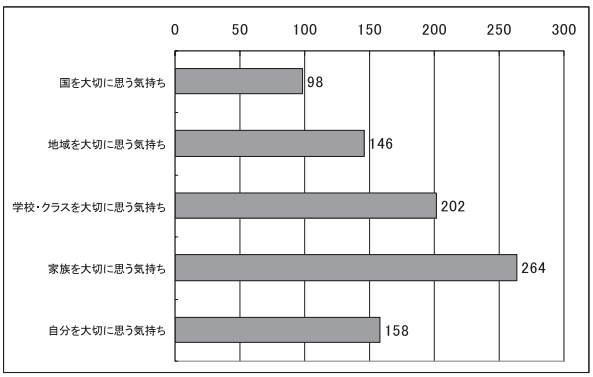

図４　愛着を強く感じるレベル

「愛国心ついて」として最後に，「国民に愛国心は必要だと思いますか」と一般論で質問した．その結果は，図5の通りである．

一般論として，約7割近くの学生が，「国民に愛国心は必要」と回答している（詳細は後述）．

（2）考　察

以上の結果を本稿の問題関心に引きつけて考えたとき，どのようなことが言えるだろうか．

・愛国心に対する肯定

まず第一に指摘できるのは，愛国心を肯定的に捉えている学生が多いということである．日本では，戦争という不幸な歴史的経緯から「愛国心」という言葉に対して嫌悪感を持つ人が多かったように思われるが，そうした感情は薄れてきているのかも知れない．今回のアンケートで8割以上の学生が「愛国心を感じたことがある」と回答しており，「愛国心」という言葉自体を否定的に捉えている若者は少ないようであった．また最後の「Ⅱ―4．国民に愛国心は必要だと思いますか.」という質問には，約7割の学生が「はい」と回答していた．これと同様の質問を行った鳥取調査ではそれぞれ77％，63％と同様の傾向が見られたことから，こうした傾向は本学特有のものではなく，一般的なものと考えられる．

この結果だけを見ると，やはり香山リカの言うように，若者たちによる「屈託のない」ナショナリズムはやはり高まっているのかとも思えるが，実のところどうだろうか．

・定義の曖昧さ

第2に「愛国心」の定義の曖昧さについてである．Ⅱ―1．(2) の質問では，「五輪やサッカーW杯などのスポーツイベントを見た時」に愛国心を感じると答えた学生が一番多かった．また，「Ⅱ―2．愛国心と愛郷心（郷土を愛する心）に違いがあると思いますか.」の質問では「はい」と回答した学生が6割近くいたが，その理由として，

「日本全土と出身地の違い」

「愛郷心とは自分の生まれ育った土地を愛する心で，愛国心はもっと範囲が広い日本を愛する心であると思う」

と規模の違いを挙げている人が大多数であり，理念上の違いにまで踏み込んだ回答は少なかった．

また，自由記述を見ると，「愛国心とは何か」とか「定義が曖昧ではないか」など，素朴な疑問を提示する回答が結構見られた．たとえば，

・*愛国心という言葉の意味を明確にすべき.*
・*何を愛国心とするかにもよるが，これからの日本を守る（？）ために必要なことだと思う.*
・*誰が「愛国心」という言葉を聞いても，疑念を持つことのないように，しっかりとした定義を決め，広めていくべきだ.*
・*国を愛する事の基準があいまい．全てを賛美するのはよくない．全ての事を賛美する教育はいらない.*
・*愛国心とは，定義が難しく，その名の元に何かをおかしてしまいそう．あぶないと思う.*
・*どういう状態が“国を愛している”というのかがわかりません.*

つまり，愛国心の中身として考えられていることは，とても素朴なものであり，しかも学生たち自身その定義について迷いを持っているということである．

では，今回の調査において学生たちは，愛国心をどのように捉えていたか．自由記述からもう少し詳しく探ってみよう．まず，「国旗・国歌，戦争」と絡めた記述をピックアップしてみる．

・*国歌「君が代」をしっかり歌うことは大切だと思う．しかし，愛国心，愛国心と強調しすぎるのも問題があると思う.*
・*愛国心は君が代の問題や，拡大すると戦争につながりそうだから，あまり好きでない.*
・*国旗や国歌による愛国心教育はいらないと思う．授業を通じて，世界の中を意識し，親しみを持つことが愛国心教育だと思う.*
・*戦争をするために行なう愛国心教育は絶対反対です.*

また，「ナショナリズム」と「パトリオティズム」という言葉に言及した以下のような記述も見られる．

・*Nationalism に傾くのは確かに危険である．過去においては，そこで間違いを起こした事もある．いま必要なのは Nationalism ではなく，Patriotism ではないだろうか.*
・*藤原正彦さんは祖国愛という言葉を使っていました．この言葉の方が自分の考えになじみます.*

以上の記述から，学生たちは，少なくとも国家主義的，ナショナリズム的な愛国心とは捉えていないことが伺える．

それでは，国家主義的ではない愛国心とは何か，以下の記述が参考になる．ひとつは，「愛国心を持つということは，日本の歴史や文化を知る，誇ること」と捉える記述である．

・*日本の歴史と文化を誇ろう*
・*日本を知り，その文化を愛してもらうことは必要だと思う.*

もうひとつは，「愛国心は自然に生まれるものである」という考え方である．

・*日本人に産まれたら自然と自分の国日本を愛する気持ちは産まれてくるのでは？*
・*愛国心を強制するのではなく，自然に国を愛する形が望ましい.*
・*愛国心は自然と生まれるものであって，強制で教え込むものでも評価するものでもない．自然となじませる必要がある.*
・*愛国心は自然と生まれるものであると考えるた*

め評価できないと思う.

総じて，学生たちの考えている「愛国心」は，「自分の国を守ること＝排他的」につながるような愛国心ではない.「日本の歴史・文化を知っておくことは必要である」,「愛する心は自然発生的なものである」といった考え方以上のものではないように思われる．あるいは，愛国心の概念をどのように捉えたらよいのか，それが曖昧な学生も少なくない．この意味では「屈託のない」「ぷちナショナリズム」という表現は，一見，的を射た表現にも見える.

・身近な社会・集団への愛着

ただ,「国」に対する愛着だけでなく，もっと狭い範囲での愛他の感情を見ると，必ずしも「国」に対する愛着のみが強いわけではなく，身近な社会・集団への愛着の方が強いことが分かる.「Ⅱ―3．次のうち，あなたが強く感じるものはどれですか.」の質問では，9割の人が「家族を大切にする気持ち」を強く感じると回答した．続いて「学校・クラスを大切に思う気持ち」,「自分を大切に思う気持ち」の順に多かった．つまり，国→地域→学校・学級→家族の順に愛他の感情は高くなるのであり，やはり自分の身近な集団に対して，より親近感を覚えていることがうかがえる.

これらのことから，かつて作田が論じたような「ナショナリズムと個人主義が提携して，真ん中の共同態主義を挟み撃ちにしていく過程」（作田，1981）が再び今日生じていると捉えることにはやはり無理があるように思われる．確かに「愛国心」を肯定的に捉えている学生は多いが，その理解は素朴なものであり，また身近な集団への愛着の方がずっと高いようである.

3．愛国心教育に関する学生の考え方

(1)「愛国心を学校教育で教えること」について

次に，愛国心を学校教育で教えることに関しては，どのような考えを持っていたか考えてみよう.

学生アンケートの「愛国心を学校で教えることの必要性」を問う項目では,「自然な形で教える」が78.0％（230人),「教える必要は全くない」が14.9％（44人),「多少教え込むことは必要」が6.1％（18人),「強制的にでも教えるべき」が0.7％（2人）であった.（図6）

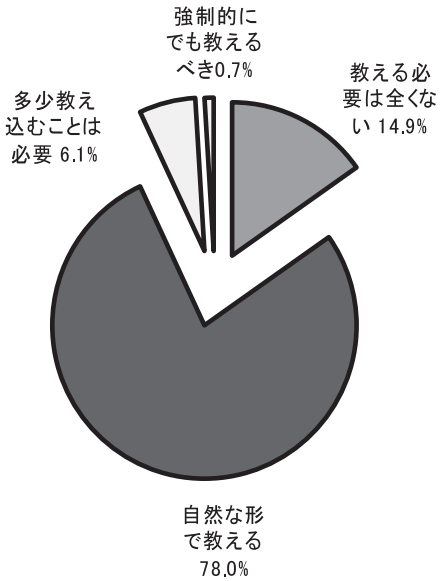

図6　愛国心教育は必要か（無回答0.3％を除く）

ここでは,「自然な形で教える」の内実が問題となる．自由記述から，それらの内実を表している記述を整理してみる.

まず,「学校教育で教える」こと自体に否定的な意見は以下のとおりである.

- *愛国心とか教育って結び付けてはいけないものだと思う．いつの間にか自分の中にあるってものだと思うから.*
- *愛国心は教えられて身につくものではないと思います.*
- *愛国心教育というものは，学校教育の一環として位置付けるのではなく，個人が自然に感じるものこそが愛国心というものだと思う.*
- *愛国心を育てるのは学校教育なのでしょうか．自分の国のことをよく知ることは必要だと思いますが，愛国心は自ら感じ，育てるもののような気もします.*

・*なんで愛国心を学校教育に取り入れ，しかも評価までもしようとしているのか分らない．愛国心は，学校で教えられなくても，自然に学んでいくものではないかと思う．*
・*自然と生まれてくるものだから，教える必要はない．*
・*なにかを愛するということは，人から教わるものではなく，自分自身が気付き，培ってゆくものであると思う．*

以上が，「愛国心は自然に湧き起る個人的な感情であるから，学校教育で『教える』というものではない」という意見である．また，「教え込み（強制）は良くない」という記述も見られる．（下線部筆者）

・*教えこみは良くないが，国を愛する心は必要であり，普通みんなあると思う．*
・*愛国心は自然と生まれるものであって，強制で教え込むものでも評価するものでもない．自然となじませる必要がある．*
・*愛国心は教え込むものではなく，国に興味があれば自然に身につくものだと思う．*
・*良い教育を受けて育てば，自然に身につくものだと思います．強制すべきではないと思います．*
・*愛国心教育を行う！！のではなく，自然に，しかも教えるのではなく気付かせたい．*

総じて，愛国心は「自然に生まれる感情」と認識している．学校教育において教えること（愛国心について気を使って教育をすること）自体を否定してはいないとしても，「教え込み（強制）」は良くないと考えている．つまり，特に「愛国心教育」と名をあげて具体的に行わなくても，他の様々な教育活動を「良く」行っていれば，「自然に身につくもの」という考え方である．

(2) 愛国心を評価することについて

(1) の点は，「愛国心を評価することの是非」に関する調査結果につながってくる．学生アンケートの「学校において愛国心教育を評価すること」を問う質問項目では，「賛成」が 11.5 %（34 人），

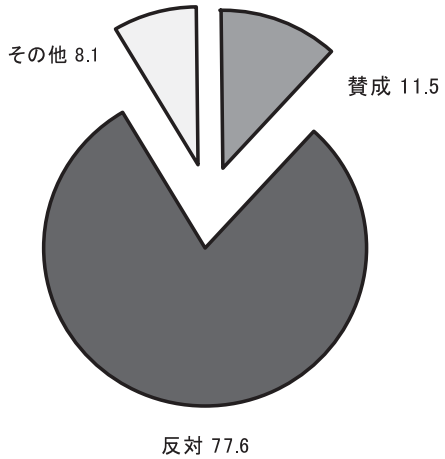

図７　愛国心を評価することについて
（無回答 2.7 %を除く）

「反対」が 77.6 %（229 人），「その他」が 8.1 %（24 人）であった．明確に「反対」が多い結果となっており，アンケート全体から見ても特徴的な結果である．

否定的な意見の多くは，「愛国心を評価することは適切ではない」，「愛国心は評価の対象にならない，できない」というものである．その理由として，「国を愛する心は，個々人の自由であるから」という意見が比較的多い．また，「愛国心の定義が曖昧であるから」という点もあげられている．このように，「愛国心」を「個々人の心の問題である」と捉え，それを評価することに対して否定的な考えを持っていることがうかがえる．

あるいは，たとえ評価をしたとしても，その評価（評定）の取り扱いに関する意見も見られた．「評価することによって，無理矢理愛国心を持たせるのもどうか」，「愛国心のない人間を排除することはできない」，「どんなに思っていても表現できなければ低くなってしまうのは理不尽」，「国を愛していないから低い評価というのは間違っている」，「国の悪い部分に対して反論するのは愛国心がないとなってしまうのか」というものである．つまり，評価することは，不適切で，理不尽なことと考えていることがわかる．

一方，肯定的な意見が含まれているコメントとしては，「強制するものではない」としながらも，

「知らないのもいけない気がする」,「何かしらの形で評価は必要」,「評定で評価するのではなくコメントで評価するのはいいと思う」といった意見があげられている．少なくとも，評価することに対して積極的な姿勢を持っているわけではないと考えられる．

(3) 方法論について

それでは，もし愛国心を学校で教えるとすれば，具体的にどのような内容・方法となるのだろうか．自由記述から，比較的具体的に教育の内容・方法に関して言及されているものをピックアップしてみる．

- *子どもの生活の改善に役立つような愛国心教育が必要だと思う．*
- *国旗や国歌による愛国心教育はいらないと思う．授業を通じて，世界の中の日本を意識し，親しみを持つことが愛国心教育だと思う．*
- *日本人としての誇りを持つとか，国を豊かにする面での愛国心を持つため（知るため）の授業だったらよいが，評価はないほうがよいと思う．*
- *国民も政治家も，愛国心ゆえに戦争になることを恐れていれば，軍事的色彩は帯びないだろう．又，愛国心教育と国際理解教育は切り離せないものである．*
- *愛国心というか，日本が戦争でしてきたひどい事も，きちんと子どもたちに教えるべきだと思う．*
- *今，日本が行おうとしている愛国心教育は押し付けでしかないと思う．「日本は良い！」という考えを植え付けるより，他国の文化を紹介し，「どっちが良いですか？」と個人の考えを持たせる方が大切だと思う．他国文化を紹介することにより，World Wide な考えを持つ事もできるだろう．*

教育の内容という点から考えると，モラル教育，歴史教育，自国と他国の文化に関する教育，国際理解教育，ということになろう．そして，その教育の目的は，World Wide な考えを持つことのできる子どもたちの育成ということになるだろうか．

以上，学生アンケートの調査結果から，愛国心教育に関する学生の全般的な考え方として「教師を目指すものとして愛国心には関心があり，自然な形で教えていくことは必要．しかし，通知表などで評価することには反対」という姿が浮かび上がった．

おわりに

今回の調査で強く印象づけられたことは，「愛国心」「愛国心教育」に関する若者たちの意見は，「賛成・反対」という二つの立場に大きく割れているというより，「広い意味での愛国心教育を，自然な形で行うべき」という言葉で表現すれば，大きくくくれるようなものだということである．この考え方において，焦点となるのは，「愛国心」の定義であり，またそれを教育する際の方法論である．

「愛国心」「愛国心教育」を肯定的・やや肯定的に捉える見方は，決して珍しいものではなかった．そうした言葉に対して，反射的に拒否反応を示さない若者は多くなっているのかも知れない．感情的に拒絶するのではなく，「愛国心」という言葉の中身を冷静に吟味しようとする姿勢を持つ若者は多い．ただし，概して素朴な捉え方をしている学生が多いようであるし，また押しつけを嫌う意見が多数見られた．

若者たちの右傾化，ナショナリズムの高まりが指摘され,「ニッポン主義」「ぷちナショナリズム」と呼んでそうした動きを危険視する見方もある．しかし,「ナショナリズムと個人主義が提携して，真ん中の共同態主義を挟み撃ちにしていく過程」（作田，1981）が生じているかと言えば，今回の簡単な調査に基づく限り，一概にそうは言えないと思われる．

本調査では，家族や学校・学級という身近な集団を大切に思うと回答する若者が多い一方，国家や個人を大切に思うと回答する者はそれほど多く

なかった．比較対象がないため，はっきりしたことは言えないが，この結果だけを見ると，日本の中間集団主義はいまだ健在のようにも思われる．もちろん，旧来の学校文化に肯定的な学生が集まりやすい教員養成学部生を対象とした調査ということもあるし，和気藹々とした本学の学風も影響しているかも知れない．十分な知見を導くにはほど遠い報告ではあるが，今後の変化に注目していきたい．

【参考文献】

文教大学教育学部高橋研究室『平成 19 年度　文教大学教育学部共同研究報告書　特別活動に関する調査研究　～学生アンケートにみる若者たちの社会意識』学内報告書，2008 年
土井隆義『友だち地獄　「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書，2008 年
藤原正彦『国家の品格』新潮社，2005 年
広田照幸『《愛国心》のゆくえ　教育基本法改正という問題』世織書房，2005 年
香山リカ『ぷちナショナリズム症候群　若者たちのニッポン主義』中央公論新社，2002 年
森田洋司『「不登校」現象の社会学』学文社，1991 年
大内裕和編著『リーディングス　日本の教育と社会　第 5 巻　愛国心と教育』日本図書センター，2007 年
作田啓一『個人主義の運命　近代小説と社会学』岩波書店，1981 年
高橋克巳「学級は“生活共同体”である　－クラス集団観の成立とゆらぎ」，今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか　教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社，1997 年